

幼稚園生活における幼児の自己発揮と幼児のかかわり

齋藤正典・大山沙織*

1. 研究の目的

幼稚園生活において、幼児は環境に主体的にかかわり、自らの興味や関心に基づいて遊びなどの活動を展開していく。そして、それらの活動における具体的な体験を通して、様々なことを学んでいく。従って、幼稚園生活においては、幼児が興味や関心を持っていること、やってみたくて思っていることを十分に行っていくようにしていかななくてはならない。遊びなどの活動の中で得られた充実感や満足感が、次の活動の意欲へと繋がっていくと考えられるからである。これに関して、例えば、倉橋の誘導保育論においても、自己充実、充実指導ということが述べられている¹⁾。これは、幼稚園が自由感を得られる場であり、その設備が十分に整っているとき、幼児は、その幼児として目一杯にこのくらいのところまでいきたいというところまで自分を発揮しようとするが、この幼児の自己充実力を信頼し、幼児が自己充実できるように指導・援助していくことが幼児教育の根本であるというものである。つまり、幼稚園生活においては、幼児がどれだけこの自己充実力を発揮しながら、自分の興味・関心に基づいて遊びなどの活動を展開しているのか、つまり“自己発揮”しているのか、ということが重要になってくるものと考えられる。

一方、幼稚園生活は他の幼児とのかかわりの中で展開される生活でもある。それは、他の幼児と一緒に遊びなどの活動を行ったり、時にはけんかななどのトラブルを起こしたりすることや、そういった他の幼児の活動やトラブル場面などを見たり、聞いたりしていく中で積み重ねられていくというものである。そして、多くの

幼児は、初めての集団生活の場である幼稚園において、このような仲間関係に参加していくことによって、社会的スキル、他者理解、共感性、自己調整力、社会的規範など多くのことを学んでいくということがこれまでの研究によって示されている²⁾。また、このような仲間関係と幼児個人の能力・スキルの獲得や発達に焦点をあてたものだけではなく、幼児間の関係そのものを取り上げて検討するような研究も行なわれるようになってきており、例えば、岩田(2000)³⁾は、“なかよし”といわれる子ども集団について、幼稚園における4歳児の縦断的な観察データの分析より、“なかよし”においては、相手をよく理解しており、遊びがスムーズに行われている一方で、“なかよし”以外のものを排除したり、“なかよし”内部での遊びの中で変動的な力関係が生じていることを明らかにしている。また、野尻(2000)⁴⁾は、3歳児の観察データより、自分が望む相手とうまく“繋がる”ことのできない幼児の姿を分析し“繋がり”の不成立の要因を明らかにしていく中で、幼児間のかかわりが、相手と“繋がり”を求めること(繋合希求欲求)と、自己充実を望むこと(自己充実欲求)との間でどのように成立(不成立)しているのかを検討している。

このように、幼稚園生活において、遊びなどの活動を通して幼児が“自己発揮”していくことや、他の幼児とのかかわりを築いていくことは重要である。しかしながら、これら2つの側面は幼稚園教育実践の中で、しばしば相反するものとして捉えられることもあるように思われる。つまりそれは、“自己発揮”が、自分の気持ちや欲求を相手に出していくといった側面を重視するのに対して、他の幼児とのかかわりを築くことは、相手の気持ちを考えたり、相手のことを思いやったりしていく中で自分を抑えてい

* 秋田幼稚園

く側面を重視し、幼稚園生活の中で幼児がこの2つの側面をどのように調整していくか／調整していくべきかといったことを問題とする捉え方である。

しかし、幼児が“自己発揮”するためには、“自己発揮”できるような他の幼児とのかかわりが築かれていることが必要なこともあり、一方、他の幼児とのかかわりを築くためには、自分の気持ちや欲求を相手に示していかななくてはならないこともあるように思われる。つまり、この2つの側面は、必ずしも相反する側面というわけではなく、相互に関連しているものであると考えられる。そこで、本研究では、幼稚園生活における幼児の遊びなどの活動の姿を記述していく中で、幼児がどのように“自己発揮”しているのか、また、どのように他の幼児とのかかわりを築いているのかを明らかにしていきながら、これら2つの側面がどのように関連しているのかについて検討していくことを目的とする。

2. 研究の方法

(1) **研究対象**：盛岡市内にある私立M幼稚園の4歳児クラスT組(男児14名、女児16名、計30名：観察対象児N男<男児、2年保育>)の観察を行った。担任はH教諭(女性、勤続23年)である。

(2) **観察期間**：2003年4月～2003年12月の9ヶ月間観察を行なった。観察は週に2回行い、午前中の自由遊び時間を中心に行なった。

(3) **観察の方法**：観察は、対象児N男を中心とした幼児同士のかかわりと担任H教諭とのかかわりの姿を中心に行なった。観察方法は、自由観察法を中心とした行動描写による。収集した観察記録は、詳細な文章記録としてまとめた。また、N男や彼の家庭のこと、指導・援助について、N男の幼稚園での様子などについて、H教諭に随時聞き取りを行い、収集した観察データを補完した。

(4) **対象児N男について(H教諭との面接などから)**：対象児Nは2003年4月に2年保育でM幼稚園に入園する。両親とも共働きで、実家は幼稚園より離れているが、祖父、祖母の家がM幼稚園の近くにあることから、降園後は祖父・祖母の家に行き、両親の帰宅に合わせて一緒に実家に帰るといった生活を送っている。また、両親の仕事の都合で、早朝に祖父・祖母の家に行き、そこで朝食を食べた後、幼稚園に登園してくることもある。一人っ子で兄弟はなく、実家と祖父・祖母の家を往復する生活を送っているために、どちらの近所にも一緒に遊ぶ友達がおらず、家で1人でビデオを見たりしていることが多い。従って、入園前に同年代の子どもと一緒に遊ぶような経験はほとんどなかった。入園当初は、幼稚園内をうろうろと歩きまわり、自分のやりたいことをなかなか見つけられず、最終的には1人で空箱などを用いて工作をするような姿が多く見られた。また、幼稚園生活の中で、やらなければならないこと、やろうと思っていることに対しては、それを自分でやろうとするものの、それができなかつたり、やれなかつたりすることでイライラしたり、元気がなくなってしまう姿も見られた。そこで、H教諭がN男を援助しようとしたり、抱っこして慰めたり元気づけようとしても、それらを嫌がって拒否する姿も見られていた。

3. 観察事例

N男は、幼稚園に入園前に同年代の幼児と一緒に遊ぶような経験がほとんどなかった。また、入園当初は自分のやりたいことがなかなか見つけられず、幼稚園内をうろうろ歩き回るような姿も見られていた。そこで、このようなN男の幼稚園での姿を記述していく中で、N男がどのように“自己発揮”していくのか、また、A男を中心とした他の幼児とどのようにかかわりを築いているのかについて記述していく。

(1) A男と一緒に遊ぶとする時期(5月～7月)

事例1 2003年5月1日(木) 晴れ

9:50～9:54 N男とA男の出会い

自分のロッカーのところに座っているNが、着替えのために隣に座ったA男に対して無愛想に、

N男:「ここじゃまだよ」

という。自分のロッカーのところに座っているAは着替えながら、面白い調子で、

A男:「お外いく時間だよー」

N男:「イヤハハハハハ」

N男は、突然声を出して笑いだす。

A男:「Nくん、お外いく時間だよー」

N男は、N君と言われた瞬間に笑うことをやめて、不思議そうにA男を見ながら、

N男:「何でぼくのお名前知ってるの?」

A男:「だってぼく知ってるもん」

N男:「前に会ったっけ。会ってない気がする」

A男:「あははは!」

A男は声を出して笑うと着替えを終えて、

A男:「ばいばーい!」

とN男にいいながら、保育室から出て行く。

入園当初、教師など大人とは元気にかかわることができるN男であったが、他の幼児と遊ぶことはなく、幼稚園内をうろろしたり、一人で工作をしていることが多かった。そのようなN男が、A男と一緒に遊びたいと思うようになったきっかけの一つが事例1である。無愛想に「ここじゃまだよ」といったN男に対して、A男は面白い調子で、「お外いく時間だよ～」といってN男を笑わせる。さらに、A男は、「Nくん、お外いく時間だよー」といってN男の名前を呼ぶ。A男にとっては、どの幼児に対しても行なっていることであったが、N男にとっては、他の幼児からおどけた調子で話し掛けられたことも、自分の名前を呼ばれたことも、それまでの幼稚園生活の中では経験していないことであった。従って、A男が名前を知っていたことはN男には大変な驚きであったと同時に、とても嬉しい経験であったと考えられる。また後

日、N男は、H教諭やA男たちと一緒に園庭でキャンプごっこで遊ぶが、それもN男にとっては楽しい経験となった。そして、このような活動の中で、A男と一緒に遊ぶことができたという経験を通して、N男にとってA男が特別に意識される存在となっていき、N男の中にA男と一緒に遊びたいという気持ちが強まっていったものと考えられる。しかしながら、A男にとっては、事例1の行動も含め、どの幼児に対しても行っていることであり、特にN男を意識する/意識しているということにはなかったように思われる。

事例2 2003年6月19日(木) 晴れ

9:25～9:35 N男の誘いを拒否するA男

N男は、3歳児のクラスにいたI教頭のところに行くと、

N男:「早く行こう。A男君も一緒に行きたい!」

I教頭:「じゃ、誘ってくださいーい」

N男:「えー、ひとりでー」

I教頭:「やってみてください」

N男はA男のところに行くと、

N男:「おーい、A男ー! ホールに行ってくれないかー!」

A男は全く応答しない。N男は、A男のそばに行くと顔をのぞきこみながら、

N男:「ホールいこう」

何度か誘うが反応しない。

N男:「ホールいこう」

A男:「うるさい!」

N男:「ホールいこう」

A男は無視する。N男は1人でゆっくりとホールのほうに歩いていく。

事例3 2003年7月10日(木) 雨

10:35～10:38 A男と遊ぶとするN男

N男は、紙コップを切って、細い紙の棒を作っているA男の様子を見ている。A男のわきには、A男がいつも持っている剣が置いてある。

N男:「俺も、あれと同じ剣作ったんだぞ!」

A男:「俺2つあるもん」

N男:「俺はひとつでいいんだ」

A男:「俺は2つがいいんだ」

N男:「おもしろいねー。A男ー」

A 男と名前を呼んだ時に、はさみで紙コップを切っているのうつぶき加減となっている A 男の顔の前に片手を出し手を振る。

N 男:「A-男-!」

A 男は、製作を続けて応答せず。そこに、T 太がやって来て、A 男にむかって、

T 太:「A 男、N 男(聞き取れず)。仲間に入って(聞き取れず)」

N 男は、T 太と A 男のあいだに自分の剣を出す。T 太は自分の剣で N 男の剣を切るようにするが、そのままその場からいなくなる。T 太がいなくなると、N 男は A 男の顔をよこから覗き込むようにしながら、

N 男:「すごいよな-この剣」

A 男は、怪訝そうに N 男をちらっと見て、

A 男:「あ?」

N 男:「すごいよな-この剣」

A 男は、すこしめんどくさそうに下を向いたまま、

A 男:「うん」

N 男:「俺もこの剣作って(聞き取れず)。いつもこれを持ってきてるな」

A 男は製作を続けて、N 男には応答しない。

N 男:「これ全部入れたら、一緒に闘おうな。あの T 太っていう子と闘うぜ!俺も手伝ってやるからな」

A 男:「わかったよ」

N 男:「やった!がんばるぞ!」

事例 2.3 は、N 男が A 男と一緒に遊びたいと思いつつも、なかなかそれができない姿を示したものである。事例 2 は、A 男と一緒にホールで遊びたいと思っていた N 男が、I 教頭を仲介して N 男と一緒に遊ぼうとした場面である。しかし、そのことを察した I 教頭は、N 男に自分で A 男を誘ってくるように言う。そこで、N 男は、A 男のところまで行って、「ホールで遊ぼう」と誘うが、A 男に「うるさい」と拒否されてしまう場面である。また、事例 3 は、製作をしている A 男の気持ちを、何とか自分の方に向けようとしている N 男の姿を示したものである。このとき、N 男は A 男と一緒に遊びたいと思っていたが、A 男は製作に夢中になっており、遊びに誘っても拒否されてしまう。そこで、A 男が製作しているものや A 男の持っている

剣のように、A 男が興味や関心を示してくれそうな話題を取り上げていきながら、自分がやりたい活動というよりも、一緒に参加してくれそうな遊び(ここでは戦いごっこ)に A 男を誘っていく場面である。A 男の「わかったよ」という承諾に、N 男は「やった」と喜び、また、A 男も N 男からたくさん褒められて、上機嫌でその後一緒に戦いごっこを行っていた。

これらの事例が示すように、この時期の N 男は、A 男と一緒に遊びたいという気持ちは強いものの、自分のやりたい遊びに誘っても拒否されてしまうため、A 男の興味や関心を引くような話題で A 男の気持ちを自分に向けさせようとしたり、A 男のやりたいことに自分を合わせていくことで、A 男と一緒に遊ぼうとしていた。事例 2 における、「ホールに行ってくれないか-」といったお願いするような言い方や、事例 3 の製作をしている A 男に寄り添って話しかけている姿などから、N 男が A 男に対して気を使いながら、探りを入れるようにして接していることが示されている。しかしながら、A 男は自分がやりたいことをやろうとすることが多く、また、N 男は特別に意識される存在でもなかったことから、A 男が N 男に合わせて何かしようとする姿は見られなかった。従って、N 男と A 男のかかわりは、A 男がやりたいことをやっていく中でのかかわりが中心になっており、N 男は、ただ A 男に従順に従っているだけという姿も見られた。そして、N 男は、A 男に対して、自分のやりたい遊びを一緒にやってくれないという不満を示すこともあったものの、A 男と一緒にいるということで満足感を得ようとしていたように思われる。

(2) A 男と一緒に遊ぶ時期(8月下旬~9月)

事例 4 2003年8月28日(木) 曇りのち雨
9:48~9:54 A 男に不満をぶつける N 男
N 男と A 男の2人で、宇宙船ごっこをしている。A 男がホールのピアノのところで、N 男が少し離れた絵本コーナーのところにいて、A 男

が「発射するんだ！発射するんだぞ！」と繰り返し返している。N男は、「こちら本部！A男！」といいながら、絵本コーナーからA男のところに出て行くも、そのたびに「発射するんだー、発射するんだー、発射するんだー！いいか？」とA男にいわれては、絵本コーナーに戻されるということが繰り返されていた。

N男：「10,9,8,7,…」

A男：「発射したか？発射したか？発射したか？よし！」

N男は、絵本コーナーからA男に向かって、

N男：「行くよ、A男。そっち行っていいか？」

A男：「発射するんだ！発射するんだぞー！」

N男：「したよ、した。」

A男：「発射するんだよー。」

A男のところきたN男の体を押して、もう一度絵本コーナーに戻るよう促す。

(中略)

N男は、絵本コーナーから顔を出してホールの方を覗くと歩いてA男のところいき。

N男：「おい、A男。来たぞ。」

A男：「発射して、乗ってるの！発射して、乗ってるの！」

いらいらしたような口調で言う。

N男：「いつまで乗ってればいいの？」

A男：「ずーっと」

N男：「えっ?!」

A男：「ずーっと」

N男：「やだ！」

A男：「だって、発射するんだよ！」

N男は返事をしないで、その場から離れていく。

A男：「おい！N男！もういいぞ！もういいぞ！もういいぞ！N男ー！N男ー！N男ー！N男ー！もういいぞ！出てきていいぞ、N男ー！」

N男を探しながら叫ぶ。

事例4は、一緒に遊ぶ中で、A男に対して不満感をぶつけたN男の姿を示したものである。この事例では、N男とA男は2人で遊んでおり、2人とも宇宙船ごっこという共通したイメージは持っていたものの、N男はA男のイメージする宇宙船が理解できなかった(A男は2人のいるそれぞれの場所が、それぞれの宇宙

船であるとイメージを持っていたのに対して、N男は自分自身が宇宙船であるというイメージを持っていたと考えられる)。N男は自分のいる絵本コーナーから、A男のいるピアノのところまで自分が宇宙船となって何度も発射していくが、その度にA男に、「発射するんだ」といって絵本コーナーに戻されてしまう。N男なりにA男の求める発射ができるように「10,9,8,7…」と数えて発射したりもするが、やはり絵本コーナーに戻されてしまう。そして、A男にどうしたらよいか聞いたりもするが、ついに「やだ！」といってその場を離れてしまった。これまでのN男は、A男と一緒に遊びたいという気持ちから、A男に従順に接していることが多かった。そして、一学期の終わり頃から、そんなN男に対してA男から遊びに誘う機会も増え、2人が一緒に遊ぶことが多くなっていった。しかしながら、そういった2人での遊びの中で、A男との遊びが自分のやりたい遊びとは違うということ、N男がA男に対して表わしたと思われる最初の場面がこの事例である。そして、この事例においては、そのようなN男に対してA男は焦ってしまい、N男を捜しながら追いかけていく。このように、2学期になると2人の関係性に少しずつ変化が見られるようになってきた。

事例5 2003年8月28日(木) 曇りのち雨

10:08~10:23 N男とA男のままと

N男、A男、T太の3人でままと遊びをしている。

A男：「おい、とんかつにしたら、お茶飲んで。あのさー、N男のお茶がこれでー」

N男にコップを出す。

N男：「俺が準備するよ」

A男：「いいよ。」

N男：「いいよ！おれ上手だから。おれ、お茶入れるの上手だからさ」

A男、N男の2人で、こんろになべをおく。

A男：「ブブブ！（お湯が沸く音）」

N男：「まってなさい。まってなさい、まってなさいよー！」

A男、T太に言いながら、棚から食器を出して

くる。

N男:「お皿」

食器を出す。なべをかき回しながら、

N男:「ごはんつくったぞー！おれ料理作ったぞ、おれの料理見てて。おれ上手だから」

A男にいいながら、なべをかき回す。

事例5は、A男との遊びの中で、N男が自分の気持ちを他の幼児に伝えながら、自分のやりたいこともやるようになってきた事例である。N男、A男、T太の3人は、保育室内のままごとコーナーで遊んでいる。そして、事例にも示されているように、N男は「俺がやる」といってお茶の準備をしたり、お皿を出したり、ご飯を作ったりするなど、積極的に遊びに参加している。また、N男は、A男だけではなく、一緒に遊んでいる他の幼児（事例5ではT太）に対しても、自分の気持ちや考えを伝えている。それに対してA男も、N男を積極的に遊びに誘い、N男と一緒に遊ぶことを楽しんでいる姿が見られる。このように、それまでのN男とA男の関係は、“N男がA男に従順でなければならぬ関係”であったものが、この時期になるとN男は、自分の考えや気持ちをA男や他の幼児にも積極的に示すようになり、自分のやりたい遊びも行なうようになってきている。

(3) Y男と一緒に遊ぼうとする時期（9月中旬～10月）

事例6 2003年10月9日（木）晴れ

9:02～9:40 Y男と遊ぼうとするN男

N男、Y男、T太の3人でホールに行くが、N男がすぐに1人で保育室に戻ってくる。そして、廊下と保育室内をうろうろし始める。しばらくしてY男の姿を廊下で見かけると、「Y男ー！」といいながらY男に駆け寄り、その勢いで2人は園庭に出る。そのまましばらく外にいるが、2人で保育室内に戻ってきて、その中で走り回る。N男は、Y男を追いかけていきながら、「Y男ー！おれを置いていかないでくれー！」といって、Y男を捕まえる。Y男は、その場に一瞬立ち止まるも、何事もなかったかのように園庭に出て行こうとする。N男は、観察

者に「ぼうしなーい！」と慌てた調子でいう。観察者が、N男に帽子をわたすとすぐにそれをかぶり、Y男のところに慌てて走っていき2人で園庭に出て行く。

(中略)

N男が、外から一人で保育室に戻ってくる。水を飲んでトイレに行き、製作コーナーにいき、工作をはじめると、A男がN男のところにくる。そのA男に対して、

N男:「ほくね、今日A男と遊べない。Y男と遊んでいるから」

工作をしながら言う。

A男:「それにおれもいれてくれ！」

N男の顔に自分の顔を近づけながら強い口調でいう。

N男:「わかった」

A男:「あのさあ、T太と遊んだらN男とあそぶから、いい」

A男は保育室を出て行く。しかし結局、この日、2人は一緒に遊ばなかった。

事例6は、それまでA男と遊んでいたN男が、Y男と一緒に遊ぼうとする姿を示したものである。Y男は2学期からM幼稚園に転園してきた幼児で、実家がM幼稚園の近くにある。N男も降園後は実家の事情でM幼稚園の近くにある祖父・祖母の家に帰宅することから、降園後、幼稚園の裏にある公園で2人で遊ぶことが多かった。そして、この時期のN男は、登園するとY男に対しておどけてみせたり、遊びに誘おうとしたりする姿が見られるようになってきた。これに対してY男は、N男と一緒に遊ぶことを拒否はしないものの、N男以外の幼児と遊びたいという気持ちが強いので、N男の存在をそれほど意識せず、他の幼児たちとグループで遊ぼうとしていた。しかし、N男は、公園で遊んだときのようにY男と1対1で遊びたいと思っていたので、Y男を追いかけたり、Y男の気を引こうとすることが多かった。事例6においても、Y男を見つけるとすぐにそばに駆け寄り、Y男が走って行くと「おいていかないでくれ」といいながら、Y男を追いかけて捕まえている。また、Y男が園庭に行こうとすると、N男も慌てて帽子をかぶりY男を追いかけてい

く。しかし、その一方で、A男と一緒に遊ぶ姿は少なくなり、この事例においても、A男に対して今日は遊べないことを告げている。それに対してA男は、遊ぶことを断られたことがショックであったのか、強い口調で、「それにおれもいれてくれ!」と言うが、N男が「いいよ」と承諾したことで、何とか落ち着いて他の幼児と遊びを開始した。

このように、この時期のN男は、Y男と一緒に遊ぶようにするために、Y男の気持ちを自分に向けさせようとしたり、Y男たちのグループの遊びに自分を合わせようとする姿が多く、事例2,3でA男に対して見られるものと同様の姿が、Y男に対して見られるようになってきた。また、N男がY男と遊ぶようにすることで、徐々にA男もN男を遊びに誘わなくなり、A男とN男と一緒に遊ぶことが少なくなってきた。

(4) 再び幼稚園内をうろうろするようになる時期 (10月下旬～11月)

10月中頃から、N男はA男とY男の間を歩き来するようになってきた。また、N男がY男と一緒に遊んでいる時、A男は他の幼児と一緒に遊ぶようになってきた。N男は、Y男との遊びでは、Y男の気持ちを自分に向けさせるようにしなければならず、Y男たちのグループの遊びに自分を合わせなくてはならなかったために、A男との遊びのような満足感を得られないこともあった。そのような時、N男はA男と一緒に遊ぶようにするが、A男はすでに他の幼児と遊んでおり、結局、どちらの遊びにも参加することができなくなってくることも多くなってきた。このような中で、N男は、徐々にA男とY男の両者から孤立していき、同じ場所で同じ遊びに取り組んでいくことができずに、幼稚園内を1人でうろうろしたり、ポーッと他の幼児の遊びを見ていたりするような姿が目立ってきた。また、それにともなって、1人で黙り込んでしまったり、自分の気持ちや考えを伝えようとせず、相手から気付いてもらおうとするような姿も見られるようになってきた。

(5) 積み木遊びを行なうようになる時期(11月初旬～12月)

事例7 2003年11月13日(木) 晴れ

10:10～10:20

積み木で基地ごっこするN男

K太が積み木で作った基地に行く。基地にいたN男が、

N男:「今日買ってきた牛乳違うみたいだよー。T男ー、牛乳かって来たぞー。」

と製作コーナーにいるT男に叫ぶ。N男、K太が牛乳パックに口をつけて飲む真似をしているところにT男がきて、

T男:「あ、それおれの!」

N男の飲んでいた牛乳パックを奪い取る。

N男:「じゃあ、それ武器にしよー」

K太は戦闘ポーズを取る。N男は、2個の牛乳パックをはめ込んでつなげながらおもむるに、

N男:「うんこって知ってる」

T男:「知ってる、うんちのこと」

N男、T男、K太の3人笑いながら、製作コーナーへ行く。N男は牛乳パックを組み合わせて、テープでとめる。

T男:「これおれのー。」

T男が、N男がテープでとめて作った牛乳パックを取り上げる。

N男:「すっげー、おまえこんなのつかえるのー。お前のね。これあげる」

T男:「ありがとう」

T太、N男の2人は基地へもどる。

この時期、N男、T男、Y男などを中心に、積み木遊びをする姿が見られた。事例7は、その積み木遊びに参加しているN男の事例である。N男は、積み木を使ってのお店屋さんごっこやお家ごっこのような遊びが好きであり、この事例においても、自分から積み木遊びに参加している。しかしながら、他の幼児が積み木で基地を作り、その基地を中心にして悪者を倒すといった戦闘ごっこを行っているのに対して、その基地の中でお家ごっこをするなど、一人で別の遊びをするような姿も見られた。また、この事例の、「うんこって知ってる」の言動に見られるように、周りの幼児の注意を自分に向けさせようとするような言動をしたり、T男に牛乳

パックを取られても反論せず、逆に「すっげー、おまえこんなのつかえるのー」と牛乳パック取ったT男を褒めたり、「これあげる」と最終的には牛乳パックを譲ってしまうような姿も見られた。このように、この時期のN男は、自分のやりたい遊びである積み木遊びに、取り組んでいこうとするものの、遊びの中で、他の幼児の注意を引こうとしたり、他の幼児の言動に自分をあわせていくような姿が見られる。

(6) A男も参加して積み木遊びを行なう時期 (12月～)

事例8 2003年12月10日(水) 晴れ

9:25～9:38 A男と積み木で遊ぶN男

N男、Y男、A男、K男は、トイレの前で積み木を組み立てて遊んでいる。Y男は製作コーナーへ行き工作をはじめ。N男も製作コーナーへ行く。Y男が、積み木の基地へ戻ってくる際に、N男が組み立てた積み木の板をぶつかって落としてしまう。

N男:「おれの壊すなよ!」

A男が、N男が作った積み木の板を「おすしー、おすしー!」と笑いながら回転させると、

N男:「おすし屋じゃないの!」

T男:「おすし屋じゃないんだあ。N男一、おすし屋にしてあげたら?」

A男、N男の2人は製作コーナーと積み木を行き来している。N男は、観察者に向かって、

N男:「おすし屋じゃないんだからね。おすし屋じゃないよ!おすし屋じゃないよ!」

と大きな声で言う。Y男にも、

N男:「ここおすし屋さんじゃないよ」

(中略) ～積み木のコーナーで遊んでいる。

K男、A男がN男の板を動かそうとすると、

N男:「だめだ!おれのだ!壊すなよ!」

真剣な口調で言った後に、

N男「おなかすいたあ。ごはんにしないか?」

A男:「うん。ちょっとまってー」

N男:「うん」

その後ままごととコーナーから道具を持ってきたりして積み木とままごとが開始される。

事例8は、遊びの中で、N男が自分の気持ちや考えを他の幼児にいいながら、再び自分のや

りたいことをやろうとするようになってきた姿を示したものである。この事例において、N男は、自分が積み木の板で作ったものを、A男が回転寿司に見立てて遊ぼうとしたところ、「それは違う」ということをはっきり言い、さらに、その積み木の板で作ったものをA男とK男が壊そうとした時も、「壊すな」と言っている。また、A男に対して、「おなかすいたあ。ごはんにしないか?」と言って、ままごと遊びをしようと誘っており、遊びの中で自分の考えや気持ちをA男に示しながら、自分のやりたいことをA男たちと一緒にやろうとする姿が見られる。

ここで、このようなN男の変化の要因の一つとして、A男が積み木遊びに参加してきたことが考えられる。事例8で示されているように、N男は、A男に対して自分の気持ちや考えを示しており、さらに、他の幼児に対しても自分の気持ちや考えを伝えている。つまり、事例5と同様に、N男は、A男とのかかわりを通して、他の幼児に対しても遊びの中で自分の気持ちや考えを言っており、その結果として、N男は自分がやりたいことを遊びの中で行なうことができるようになったものと考えられる。

4. 考察とまとめ

9ヶ月間の観察記録より、N男の幼稚園における生活の姿を記述してきた。これらの記述から、(1) N男の“自己発揮”、(2) N男と他の幼児とのかかわり、(3) “自己発揮”と幼児のかかわりとの関連性、の3点について考察してみたい。

(1) N男の“自己発揮”

幼稚園生活の姿より、N男の“自己発揮”は、I、自己発揮を抑制する時期(4月～7月)→II、自己発揮できる時期(8月下旬～9月)→III、自己発揮を抑制する時期(9月中旬～10月)→IV、自己発揮できない時期(10月下旬～11月)→V、自己発揮を抑制する時期(11月初旬～12月)→VI、自己発揮できる時期(12月～)と変化しており、“時系列的に自己発揮できるようになっ

てくる”といった直線的な変化はしていないことが明らかとなった。ここで“自己発揮を抑制する”とは、意識的に自分の考えや気持ちを抑えて、自分の興味・関心のあることをやらないようにすることであり、主としてN男が他の幼児と一緒に遊ぼうとするために、他の幼児のやりたいことに自分を合わせていこうとする時期に見られた。つまり、I(4月～7月)では、A男と一緒に遊ぶために、A男に合わせた結果として、III(9月中旬～10月)では、Y男と一緒に遊ぶために、Y男に合わせた結果として、VI(11月初旬～12月)では、他の幼児と一緒に積み木遊びをするために、そこで遊んでいる幼児に合わせた結果として“自己発揮を抑制する”ことになったものと考えられる。次に、“自己発揮できる”とは、自分の興味・関心のあることや、やりたいことを行なおうとする/行なうことができることであり、II(8月下旬～9月)やVI(12月～)におけるA男のように、N男が自分の気持ちや考えを言える幼児が存在する時期、つまり、野尻⁴⁾のいう「繋がっている」と考えられる幼児が存在する時期に見られた。そして、これらの時期においては、A男とのかかわりの中で、A男に対して“自己発揮できる”ことが、さらに他の幼児に対する“自己発揮”へと広がっており、A男とのかかわりによって、幼稚園での生活全体においてN男が“自己発揮できる”ようになったことが示された。最後に、“自己発揮できない”とは、自分の興味・関心のあることや、やりたいことがない/できないことであり、他の幼児とのかかわりがなくなり、孤立してしまっような時期に見られた。例えば、IV(10月下旬～11月)におけるN男は、A男とY男のどちらの遊びにも参加できなくなってくるにつれて、何をするでもなく幼稚園内を一人でうろうろ歩きまわったり、他の幼児の活動をボーッと見ていたりすることが多くなってきており、自己発揮できなくなっていたものと考えられる。

以上のように、N男の自己発揮は、A男を中心とした他の幼児のかかわりと関連しながら変化していることが示された。つまり、他の幼児

とのかかわりが希薄である/かかわりがないとき、N男は自己発揮できず、他の幼児とかかわりを作ろうとしているとき、N男は自己発揮を抑制し、他の幼児とのかかわりが十分にできているとき、N男は自己発揮できるものと考えられる。また、N男にとって、特に、A男とのかかわりは重要であり、A男とのかかわりの中で自己発揮できることが、他の幼児とのかかわりにおける自己発揮へと広がっていくことも示された。つまり、A男とのかかわりによって、N男は幼稚園の生活全体においても自己発揮できるようになっていると考えられ、N男にとって、A男とのかかわりは重要なものであることが明らかとなった。

(2) N男と他の幼児のかかわり

N男は、1対1のかかわりを求めようとする傾向が強く、観察期間における他の幼児との主なかかわりは、A男とY男とのものである。A男とのかかわりは、事例1などがきっかけとなってA男と一緒に遊ぼうとする中で、N男がA男に従っていくかかわりが中心となっていた。しかし、2学期になって、事例4にあるように、N男が自分のやりたいことや、やりたくないことをA男に表わしたことで(自己発揮)、2人のかかわりは、互いの気持ちや考えを言い合えるものへと変化していった。一方、2学期の初めに、降園後に公園で一緒に遊んだ経験がきっかけとなって、N男はY男と幼稚園でも一緒に遊びたいという気持ちを持つようになる。そして、そのY男とかかわりを徐々に持とうとする中で、事例6のように、A男に対して「今日は、一緒に遊べない」と言うなど、N男とA男が遊ぶ機会が減少してきた。その結果、A男は他の幼児と遊ぶようになり、N男とは一緒に遊ばなくなっていく。また、このY男とのかかわりについても、Y男たちのグループにN男が合わせていかなくはならず満足感が得られないこともあり、徐々にY男たちのグループから抜けていくこともあった。しかし、A男も、すでに他の幼児と遊ぶことが多くなっていたことから、A男がN男と一緒に遊ぼうとすることも少な

くなっており、N男は、A男とY男のどちらの遊びにも参加できないような孤立した状況になっていった。そして、幼稚園内を一人でうろろ歩きまわったり、ポーッと他の幼児をみているような姿が見られるようになる。その後、自分のやりたい遊びである積み木遊びに自ら参加して(自己発揮)、その遊びを続けていく中で一緒に遊んでいる幼児に合わせていこうとする姿も見られたが、A男がその積み木遊びに参加するようになったことで、A男とのかかわりの中で、徐々に自分のやりたいことをA男や他の幼児と一緒に遊びの中で行なう姿が見られるようになってきた(自己発揮)。

以上のように、N男と他の幼児とのかかわりの変化を見てみると、それは、N男自身の“自己発揮”がきっかけとなって起こっているように思われる。例えば、A男とのかかわりの変化は、事例4にあるように、N男が自分がやりたくないことをA男に示したことがきっかけであり、A男やY男からの孤立状態からの脱却も、自ら積み木遊びに参加できたことがきっかけとなっている。また、その積み木遊びの中における他の幼児とのかかわりも、積み木遊びに参加してきたA男に対して自分のやりたいことを示したことによって変化してきており、N男の“自己発揮”が、他児とのかかわりの変化のきっかけになっていると考えられる。そして、N男の場合は、特にA男に対する“自己発揮”が重要であると考えられ、それによって他の幼児とのかかわりも変化していることが示されている。

(3) 幼児の“自己発揮”と幼児のかかわりの関連性

これまで考察してきたように、“自己発揮”と幼児のかかわりとは相互に関連したものであると考えられる。つまり、幼児の“自己発揮”は、他の幼児とその時どのようなかかわりをしているのかによって大きく影響されるものと考えられる。つまり、野尻⁴⁾のいうような、「繋がっている」幼児がいるとき、その幼児は“自己発揮”

することができ、「繋がろう」としている幼児がいる時、その幼児は“自己発揮を抑制”し、誰とも繋がっていない幼児は、“自己発揮できない”ことがN男の事例から示された。しかしながら、その一方で、“自己発揮”に影響する他の幼児とのかかわりが変化するためには、幼児が“自己発揮”する必要があることも明らかとなった。つまり、幼児間のかかわりに変化が見られるとき、幼児の“自己発揮”がその変化のきっかけとなっているものと考えられる。

以上のように、幼児の自己発揮と幼児間のかかわりは相互に関連しており、その相互関連性の中で、その両者のあり方が決まってくるものと考えられる。今後の課題として、幼児の自己発揮と幼児のかかわりの関連性をこのように捉えることができるとき、保育者の援助はどうあるべきかについて検討していきたい。

参考文献

- 1) 倉橋惣三 『幼稚園真諦』1976年 pp.30-41.
- 2) 例えば、無藤隆・内田伸子・斎藤こずえ『子ども時代を豊かに：新しい保育心理学』1986年 pp.59-111 学文社.
- 3) 岩田恵子 「なかよしとは何か—幼稚園における4歳児の仲間関係を通して—」『日本女子大学紀要家政学部 第47巻』2000年 pp.19-24.
- 4) 野尻裕子 「幼児にとって相手と「繋がる」ことの意味—うまく「繋がる」ことのできない3歳児の一事例から—」『保育学研究 第38巻第1号』2000年 pp.20-27.

謝 辞

本研究は、大山が収集した観察・聞き取り記録を大山と齋藤で分析、検討した結果をまとめたものである。本研究を進めるにあたり、長期間の観察及び聞き取りにご協力していただき、また、多くのご指導・助言をいただきました盛岡大学附属松園幼稚園の吉田園長、石川教頭、畠山教諭をはじめとする教職員の皆様、園児、保護者の皆様に心から感謝いたします。